



40年前の、大学3年(学部1年)に進級したばかりの事である。写真部の先輩達から「発掘」旅行への誘いがあった。夏休みの約1週間、冷房のきいた3つ星の高級ホテルで想像を絶する食べきれない豪華な料理と飲みきれない冷えたビール、そして、数々の地酒が我々を待っているという日常にはあり得ない夢のような話であった。しかも、この発掘に参加すると、発掘作業の中心を担う解剖学教室のテストが自動的に高得点になるというおまけまでついていた。私と同級生で同じ写真部員のTはなんら迷うことなく、この《うま

日本人はアイヌ民族の直接の子孫であるとの仮説を爪の形状から実証しようとしていた解剖学のM教授や今回発掘する貝塚を1948年に発見された考古学のI教授らの中心メンバーは明日到着されるとのことだった。勧められたお風呂をでると、大部屋に待ちに待った食事が運ばれ、教授の秘書のSさん達が食事を運ぶ手伝いをしていた。先輩達が話していたほどではなかったが、食事の内容は和食を中心に十分満足のいくものであった。ビールは十二分に冷えていたし、地酒も決して期待を裏切るものではなかった。

## 実現しなかった

### 《M教授のパンツの洗濯》

情報広報部

橋本 洋一

翌朝、朝食を急いで取り、市の教育委員会が用意してくれたマイクロバスに乗り込んだ。車は街の中を通り抜け、瞬く間に農村地帯に入った。道は狭く、帯に入った。道は狭くなり、凹凸もひどく、捕まっつけないと振り

すぎる《話に飛びついたのは、きわめて自然の成り行きであった。

札幌駅を発つて2時間半、伊達紋別駅に着いた。地球温暖化がこの時から始まったのではと思うほど、暑い日差しが私達を直撃した。駅前にはタクシーが一台もなく、炎天下のもとで待つこと十数分、一台のタクシーがようやく姿をあらわした。この1週間宿泊するホテル名を告げて5、6分でホテルに着いた。目の前に3つ星の超高級ホテルとは似ても似つかわしくない木造のあきらかに斜めに傾いている建物が目に入った。

落とされそうになる悪路であった。車と出会うことのない田舎道を進むこと約30分でサイロのある家の前に着いた。サイロと住宅に挟まれた細い道を通るとなだらかな傾斜の丘が見えてきた。丘にあがる入り口の横に貝塚の名を書いた立て札があり、詳細な説明が書かれていた。

小高い丘の頂上が発掘現場であった。その現場に張られた青いビニールシートを取り除くのを手伝っていると、「今朝の搾りたての牛乳ですよ。」と家の奥さんが大きなポットと紙コップを渡してくれた。先輩達が強調して

いた、いわゆる《搾りたての生乳》であった。新鮮な熱処理されていない生乳を口に含みながら、縄文時代に夢を馳せて、貝塚を発掘するそんな人生を送るのもまんざらでもないなあと思った。

本格的な発掘作業が始まった。縄文式土器やトドの脊椎の一部が見つかった。できるだけ丁寧に発掘物を傷つけないようにと考古学のI教授はずぶの素人である私達学生に厳しく注意を喚起した。炎天下で全身日焼けして、旅館では夕食を取るとすぐに爆睡に陥るといった生活が連日続いた。

日頃の身体の鍛え方があまりにも足りないためか、旅館に帰ると疲労困憊し、すぐに眠たくなり、解剖学の試験の高得点を取るために必須である《M教授のパンツの洗濯》を実行に移すことができず、札幌に戻ることにした。

2009年に世界文化遺産候補に登録された《北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群》を構成する縄文時代前期の北黄金貝塚はその名称の由来が地名の黄金薬村(おこんしべ)「オ・コンプ・ウシ・ベツ」.. 昆布のとれるところの川)を後に「黄金」と略称されたものであるらしい。

両教授はすでに鬼籍に入られたが、かけがえのない人類の財産である世界文化遺産候補の発掘作業に携わった貴重な経験を思い出しながら、北海道を愛する道民の1人として、北黄金貝塚を含む《北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群》の世界文化遺産登録が近い将来、実現することを心から願っている。